

文献探訪：『男色の日本史：
なぜ世界有数の同性愛文化が栄えたのか』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学教育研究センター 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新ヶ江, 章友 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180530-005

Title	文献探訪：『男色の日本史：なぜ世界有数の同性愛文化が栄えたのか』
Author	新ヶ江，章友
Citation	大阪市立大学大学教育. 15 巻 2 号, p.91-93.
Issue Date	2018-04
ISSN	1349-2152
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	ゲイリー・P・リュープ『男色の日本史：なぜ世界有数の同性愛文化が栄えたのか』、藤田真利子(訳)、作品社、2104 年、ISBN978-4-86182-117-2、C0021
DOI	10.24544/ocu.20180530-005

Placed on: Osaka City University

■ シリーズ

—— 文献探訪 Book Review ——

新ヶ江章友（大阪市立大学都市経営研究科）

ゲイリー・P・リュープ『男色の日本史—なぜ世界有数の同性愛文化が栄えたのか』、藤田真利子（訳）、作品社、2104年
ISBN978-4-86182-117-2 C0021

近年、メディアでLGBTという用語をなにかと目にするようになった。LGBTとは、Lesbian（レズビアン）、Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシュアル）、Transgender/sexual（トランスジェンダー／セクシュアル）のそれぞれの頭文字をつなげた略語だが、LGBTQやLGBTQAなどと呼ばれることもある（QとはQuestioningの頭文字で、自分の性的指向が分からない人のことを指し、AとはAsexualの頭文字で、他人に対して性的関心が向かない人のことを指す）。今年1月に、岩波書店が出版した『広辞苑』に新たに「LGBT」という項目が新規で書き込まれたが、その記述内容が間違っているという専門家の指摘を受け訂正された。LGBTのうち、LGBについては性的指向（誰を性的欲望の対象とするか）を指すが、Tについては性自認（自分の性別をどのように認識するか）を指し、例えば男性から女性に性転換をした人の性的対象が誰かはここでは問われておらず、自分を男と認識するか女と認識するかということのみが問われている。したがってLGBTがすべて「多数派とは異なる性的指向をもつ人々」と述べられることは間違いである。きちんとした定義が理解されないままLGBTという言葉だけがひとり歩きしたことにより、思わぬ誤解を生む結果ともなっているのは残念なことである。

LGBTという言葉については、もう一つの誤解がある。LGBTはアイデンティティの問題でもあるのだが、例えば「江戸時代にもLGBTがいた」という認識は正しいのだろうか。昨年7月5日の『毎日新聞』夕刊の中で、「江戸から見たダイバーシティ」と題した短いコラムが、江戸文化を研究している法政大学総長の田中優子氏によって書かれていた。その中では、次のよ

うに述べられていた。「江戸時代、LGBTの存在は自然なものとして受け止められていた。平賀源内をはじめ、LGBTの人びとはそのことで差別を受けていないばかりか、自分でも全く気にしていない。井原西鶴の小説にもLGBTはよく登場する。差別する社会にいれば、自分のありかたに不安を覚え、自信を持って生きられなくなり、能力を存分に伸ばすこともままならない。いかなる差別も、人を闇に追いやる」。ある特定の属性を持った人々を差別する社会を批判し、多様な人々の能力を発揮できる社会を目指そうというスローガンのもと、LGBTという用語をあえて用いながら江戸社会のダイバーシティを説明しようとした田中氏の意図は分からないではないが、江戸時代に自分のことをLGBTだと認識している人はまずいなかった。それは、LGBTというアルファベットを江戸時代の人々がそもそも使っていなかったという意味ではなく、同性と性行為を持つ人が、自分自身の性格の根本的なところで「同性愛者」（つまり「ゲイ」）だとは認識はしていなかったということである。同性と性行為を行うことが、アイデンティティとは結びついていなかったのである。

前置きが少し長くなってしまったが、仮に江戸時代に「ゲイ」に似た言葉があるとすれば、それは「男色」であろう。しかしこの男色という表現は、その人の性格や個性の根本にあるアイデンティティ（現代でいうところの「ゲイ」という自認）を示してはいない。つまり江戸時代の人々は、男性同性間で性行為を行なったとしても、自分自身をあえて「同性愛者」だと認識して行動していたわけではないということである。むしろ男色は、食べ物の好き嫌いを示す「嗜好」と関わりの深い用語だと言える。リュープは、「男色は、男なら誰にでもある傾向だが、（中略）こうした態度は、『男色好き』という言葉が『酒好き』と似ていることにも反映されている。親は息子に身の破滅になるような同性愛関係は避けるようにと助言するだろうが、そうした助言の仕方は、男性間の性的接触をまったくしないということを期待していないように見える」と述べている（p.210）。つまり、江戸時代の男性のほとんどは、男性とも女性とも性的関係を持っていたのであり、当時戒められていたのはその接触の過多なのであ

り、男性同性間の性的関係を全く否定するものではなかった。

江戸時代の社会史を研究するリュープは、様々な江戸時代の文献を読んでいると、同性間の性的関係についての記述に何度も遭遇し、当時、男性同性愛行動が標準的なことだったと確信するようになり、少なくとも都市の男性は、たいてい他の男性との性的関係に向かう傾向があり、そのような関係は広く受け入れられたと指摘している。つまりリュープは、江戸社会においては両性指向が普通の状態だったと結論づけているのである (pp.12-13)。江戸の社会史の理解において同性愛関係の理解が欠かせなかったという視点も、大変興味深い。以下、簡単に本書の構成を記したい。

序 章 なぜ日本には、古代ギリシャとならば同性愛文化が花開いたのか

第1章 日本の古代～中世における男色の発展

第2章 日本における都市発展と男色の商業化

第3章 全盛期を迎えた日本の男色文化－徳川時代

第4章 男色は日本社会にいかに受容されていたか

第5章 日本のジェンダー構造と男色

終 章 明治以後の日本社会と男色

ここでは本の内容の詳細にまで踏み込むことはできないが、重要だと思われるいくつかのポイントを指摘しておきたい。江戸時代の男性同性愛は嗜好だと先に述べたが、その関係には、いくつかのパターンが見られる。一つ目は、年齢による序列の重視である。両者の間に年齢の差がある場合、年下を受け手となる。しかし、歌舞伎役者などの男性売春者は、年齢が上のものでも受け手となることがあった。二つ目は、両性具有的な相手が性の相手としてより好まれたということである。当時の春画などをみると、女装した男性との性行為の場面が多く描かれていることがよく分かる。三つ目は、性行為の場面で受け身の方が差別されるということではなかったということである。例えば古代ギリシャやローマでは、男性同性間の性行為において受け手となる方は男性性を放棄したとみなされ差別された（奴隷の場合は年齢にかかわらず常に受け手となり差別された）。しかし日本においては、成人男性同士

であっても挿入される側が不名誉となることはなかった。以上のように、野放図に性的接触が行われていたわけではなく、あるルールのようなものが存在していたのである。またリュープの指摘によると、当時の男性同性間の性行為は肛門性交がメインであり、オーラルセックスはなかったという（しかし別の研究者によると、江戸時代にもオーラルセックスが行われていた記録がいくつかあるという指摘もなされており、リュープの主張に反論が加えられている）。

今回筆者が本書を取り上げたのは、ただ単に江戸時代の同性愛文化を紹介したかったからではない。一つは、この4月から本学の人権科目として「クィアスタディーズ入門」という授業を担当することになり、その際にぜひ学生にも本書を読んでほしいと思ったからである。その際に学生に考えてほしいことは、江戸時代（あるいはそれ以前の日本において）、男性同性間の性行為は差別されることなく広く受け入れられていたのに、なぜそれが日本の近代化以降、病理化され、差別され、偏見に塗れることになったのかというその歴史的過程である。同性愛はともすると自然の摂理に反すると考えられ、1920年代以降「変態性欲」と呼ばれるようになった（この経緯については、例えば前川直哉（2017）『〈男性同性愛者〉の社会史』作品社、などに詳しい）。現在の同性愛に対する眼差しは実は1920年代に作られて、現代に引き継がれているのである。日本において同性愛を差別する歴史は、それほど長くはない。

学生には、現在当たり前だと思われる価値観を疑う目をぜひ養ってほしいと思っている。ここ100年弱の間に同性愛に対して冷たい眼差しを向けてきた現代社会に生きる私たちの方が、人間の長い歴史から見た場合、実は逆に「変態」だったのではないか。現代における同性愛差別の背景としては、同性間の性行為は生殖と結びつかないという、いわゆる人口の問題からしばしば指摘されてきた。しかしその視点は、生産性と結びつかないものは切り捨てるという近代の産物でもあったと言えるだろう。では、近代という時代が生み出してきたものとは逆になんだったのだろうか。近代化によって私たちが失ったものとはなんだったのだろうか。現在、世界はまさに激動の時代を迎えよう

としている。このような時代にこそ、頭を柔軟にして、新しい価値観を創造できるような人材を養成することが大学には要請されているのではないだろうか。同性愛について考えることは、近代について省察する一つのきっかけともなるのである。